

『^{ちい}小さな^{おんなせんし}女戦士』

富田林高等学校 3年 中野 満里奈
3年 高山 千鶴

とうとう、村の広場に見はり^{とう}塔が、
どうどうとたちました。

彰いちぞくは、見はり^{とう}塔を空にささげました。

おばあちゃんはみんなの前で言いました。

「私たちは、この見はり^{とう}塔を『空の^{とう}塔』と名づけましょう。

そして、ここをわたしたちのひなんじょにしましょう。」

小蕾は思いました。

「これは^{ほんとう}本当のぼうけんのチャンスかもしれないわ。」

しかし、^{ちょうろう}長老たちは小蕾が見はり^{とう}塔に来ることを
ゆるしませんでした。

「小さい女の子がどうやって^{とう}塔をまもるんだ？

お前は^{せんし}戦士にはなれないよ！」

小蕾もあきらめません。

「でも、ムーランは^{おんなせんし}女戦士だわ！」

『あんなのただの言いつたえだ!』と

長老^{ちやうろう}たちはわらいました。

もう一度、長老^{ちやうろう}の徳はさあさあ、と
小蕾をおいだしました。

「ここは子どもがあそぶ場所^{ばしょ}じゃないんだ！」

やがて、大人たちは見はることに
あきあきしてきました。

「このあたりに盗ぞく^{とう}はいない。
これは金のむだづかい。
今だって本当に時間のむだづかいだ！」

そこで長老^{ちやうろう}の徳が言いました。

「小蕾や、ここへ来てわたしたちをたすけておくれ。
お前が見はり塔^{とう}の戦士^{せんし}になるときが来たんだよ。」

小蕾が見はり塔^{とう}をまもっているので、
長老^{ちやうろう}たちはごはんを食べ、ねむりました。

季節^{きせつ}はどんどんすぎました。

小蕾は塔^{とう}をまもりながら考えるのです。
盗ぞく^{とう}が来たときのことー。

家や木、田んぼもけものにかわります。
小蕾はそれぞれのけもの形や色、
うごきをよく見ました。

なかでも木のりゅうは、小蕾をこまらせたあいてでした。

りゅうは、小蕾が頭の上のしんじゅのような^み実を
とろうとすると、おどり出しました。

そのしんじゅがなくなるころ、みどり色だったりゅうたちは、
まつ赤な色にかわり、まるでネコのようにになりました。

小蕾は、ネコたちのするどいつめを
よけなければならなくなりました。

しばらくすると、ネコたちはやせほそり、
木はぼうっきれのようにー。

すぐに、村は白いもうふでおおわれました。
冬が来たのです。

そして、すべてのけものはねむりましたが、
それでも小蕾は見はっていました。

ふたたび空が晴れ、花がさくころまでに、
この村に小蕾のてきはいなくなりました。
けれども、森にかくれている^{とう}盗ぞくを
小蕾はこわがっていました。

ある日の夕方、小蕾は村のものではない
あやしいかげを見ました。

^{ちやうろう}長老たちが話していた^{とう}盗ぞくにちがいありません！

小蕾はカいっぱい、かねをならしてさげびました。

「盗ぞくがきた!盗ぞくがきたわ!」

彭いちぞくは小蕾のあいずに気づきました。

だいじなものをひとまとめにして、

空の塔^{とう}ににげ、とじこもりました。

盗^{とう}ぞくたちは村の家をむりやりこじあけて

中にはいりましたが、

食べものもお金も、村の人びとも、

なんにも見つけることができません。

ふとあたりを見わたすと、塔^{とう}がありました。

それはまるで、きょじんのよう大きく、

金色に光るまどはこちらをにらむ目のようです。

盗^{とう}ぞくたちは塔^{とう}にかけよりました。

そして、

…ドアをガンガンたたきました。

…石のかべをつめでひっかいて、のぼろうとしました。

…まどをのぞきこもうとしました。

てつのドアやまどはちっともうごきません。

そして、とうとう盗^{とう}ぞくたちは何もとらないで、

村から出ていったのです。

^{とう}盗ぞくが行ってしまったあと、
おばあちゃんは小蕾をほめました。

「あなたは村をすくったのよ。
あなたは本物の見はり塔の戦士だわ!」

小蕾はお父さんへの手紙を
書きたくてしょうがありませんでした。
このとき、小蕾はお父さんがいつも話してくれたように、
この、小さな女戦士のものがたりをつたえていきたい、
と思ったのでした。